

## 令和6年度川口賞報告書

報告者：成松勇樹（広島大学大学院統合生命科学研究科）

参加学会：ENDO2024

開催場所：Boston, Massachusetts, United States of America

日程：2024年6月1日－4日

発表数：参加者：約7000名、口頭発表：36セッション、ポスター発表：109セッション

### 参加報告

米国内分泌学会 Endocrine Society が主催する本会議は、1916年から100年以上続く、内分泌学を対象とした歴史と伝統のある国際会議です。内分泌学の基礎研究から症例報告まで、数多くのセッションに分かれており、会場は熱気で溢れていました。演題数も非常に多く、特に poster session は約600題が1日ごとに入れ替わっていたため、毎日最新の知見の数々を必死にインプットしました。

本会議では、AIを用いた内分泌学研究の plenary session が特に印象的でした。近年はAIや機械学習の急速な発展に伴い、基礎生物学や医学分野でもAIを用いた研究が活発に行われるようになってきました。本セッションでも、計算生物学分野で多大な貢献をされた研究者の発表を聞くことができました。特定の疾患の治療標的を推定したり、健康寿命を計算的に推定したりと、健康科学におけるAIの可能性に触れることができ、内分泌学における基礎研究と臨床研究を繋げることができる重要な技術になることを改めて勉強することができました。

私自身は、「A Novel Murine Model of Obesity Through the Neuroendocrine System」というタイトルで発表させていただきました。一般的な肥満マウスの作製には通常16週間ほどの期間が必要です。一方で、新規に発見された神経ペプチドである neurosecretory protein GL (NPGL) を利用して作製したマウスは、たった2週間で肥満状態を誘導することができ、今回はその表現型について報告しました。1時間半の発表時間でしたが、動物学・比較内分泌学分野における著名な研究者も含めた10人以上の研究者と活発な議論を行うことができました。私が発表したセッションは肥満や食欲、脂肪組織に関連するところだったこともあり、国内ではあまりお会いすることができない、近しい専門分野の研究者とも時間をかけたディスカッションができたのも、対面で国際学会に参加する醍醐味だと感じました。

歴史的な円安が進む中、任期付きの若手研究者で旅費に自由に使うことができる研究費をほとんど有していない私にとって、国際学会発表への本支援は大変ありがたいものでした。本会議に参加し、濃密な議論を交わすことができたため、本研究成果をまとめた投稿論文は、動物学・比較内分泌学分野に多大な貢献をもたらすことができると確信しています。今回、本発表をご支援していただいた日本動物学会の関係者各位に心より感謝申し上げます。